

(別紙2)

審査の結果の要旨

氏名 はぎの萩野 りょうこ了子

本論文は、和歌の修辞が、万葉集から古今和歌集にかけて、いかに変化を遂げたかを分析・考察する。総論・各論（三篇七章）・資料編（序詞一覧）・終章から構成される。

総論は、古代和歌修辞の研究史を、序詞を中心にまとめ、本論文の意義を確かめる。歌謡研究の側から、序詞は、即境的景物に寄せて陳思する発想法とされるが、源流はともあれ、和歌研究は、やはり心情表現のための修辞としていかに意識されたかを解明する必要がある。序詞は和歌史の早い段階で枕詞と混淆しつつ修辞化し、かつ本旨への転換部で二語を掛けることから掛詞を分出する。本旨への転換法によって、反復か重複か、同義か異義かなどで五つに類別され、その消長の観察が和歌史の考察に有効であるという。

各論第一篇は、序詞の変容を記述し、その動因を考察する。万葉歌の序詞が本旨と局部的に繋がるのに対して、古今集撰者らの歌では、序詞の物象表現全体が心情表現と異義語（掛詞）によって重ね合わされていると指摘する（第一章）。次いで序詞を万葉集内で通時的に辿り、古今集の表現への変化の要因を、物象の力に対する無批判の信頼が崩壊したことに求める（第二章）。第二篇は、同音繰り返し式序詞に焦点を当てる。万葉歌には、地名以外に掛詞で転換する序詞が少なく、主に物象をシンボル化する比喩形式や、同音繰り返し形式によって担われる。一方、古今集では、読人不知歌は万葉歌と同傾向を示すが、撰者らの作は地名を反復する序詞が多く、序と本旨の結合が強められているという（第一章）。続いて地名と序詞の関係に絞り、万葉集では、景物から地名を媒介に人事を起こす相聞歌（繰り返し形式）と、人事から地名に続いて景物を述べる雑歌（掛詞形式）とが対照をなすが、古今集では、両形式とも地名の前後で内容が一致する例が増えると指摘する（第二章）。第三篇は、掛詞の誕生と展開についての論。掛詞は序詞からの分出と考えられるが、古今集で多く縁語を成す点から見て、万葉集の譬喩歌との関連が無視できず（第一章）、掛詞に使用される語彙もその関係を示している。そこには序詞による転換から、寓喩的な二系対比への構造的な変化があった（第二章）。古今集で発達する物名歌は、誹諧歌とともに万葉集の巻十六所収歌に源流を持ち、それを洗練させたところに成立すると説く（第三章）。

本論文の特徴は、上代・中古に跨ることで分裂しがちな序詞研究の状況に鑑み、古代和歌史全般に目を配り、変化の様相を詳細に跡づけた点にある。歌人各々の創作の営みを超えて、表現の仕組みを明らかにした功績は大きい。対象の多様性に応じきれず、叙述が煩瑣になりがちで、論旨に明快さを欠くなど、今後の課題も多々あるが、審査委員会は、上記のような研究史的意義を認め、博士（文学）の学位に値するとの結論に至った。